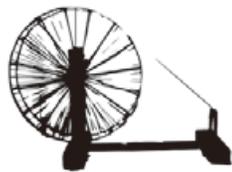


岡山県郷土伝統的工芸品

# 烏城紬

— 伝統に生きる —



烏城紬保存会



## ごあいさつ

四代目織元 須本 雅子



両親が亡くなり、烏城紬を20数年一人で作っていました。

いつものように一人で仕事をしているときに、当時の岡山市立岡西公民館の館長さんが訪ねて来られ、「須本さん、一人でやっているといつかはなくなってしまいますよ。烏城紬の講座を始めませんか？ 公民館で機織りをしているところを皆さんに見ていただきましょう。」と、優しく声をかけてくださいました。

何日か経って実演をすると、習いたい方が10人程度になり、平成7年2月から烏城紬の主催講座を3年1クールで始めました。

主催講座を始めて29年目になりました。10期生を迎えたのを機に、歴史と技術を伝える本書を作りたいと思いました。

烏城紬をここまで導き応援してくださいましたすべての方々に感謝申し上げます。



また、長い間、技術を守り、良い作品作りに力を注いでくれた烏城紬保存会の皆さんにお礼申し上げます。

令和5年8月吉日





## 発刊に際して

本書は、昭和64年（1989）に烏城紬の成り立ちをとどめておくために初版本が発刊されました。創始からの時代歴史を留めておくことを目的とした資料的側面と、烏城紬が製品として完成するまでの流れや技術の解説書的側面の両方を網羅した、烏城紬を真正面からとらえた解説資料として編集されました。

初版発刊から35年を迎えた現在、この度復刻改訂版として再度発刊することとなりました。

初版発刊当時から作業手順や技術的洗練も進んだ現在、烏城紬の製作に必要な技術的解説を改訂させていただくとともに、歴史的資料も加筆改訂することとしました。貴重な写真資料は複製し、表記表示等の不具合は修正いたしました。特に工程図を含む技術解説については、現在の作業方法を基準にして再構築しています。

初版を作られた水田氏への感謝を込め、創始の意を大切にしながら、烏城紬 - 伝統に生きる - 編集委員会の文責で再編集いたしました。

本書が烏城紬の唯一無二の歴史技術解説書となりますことを心より願ってやみません。

ぜひご一読賜れば幸甚に存じます。

『烏城紬 - 伝統に生きる - 令和5年度復刻版』

編集委員一同





## 烏城紬 烏城紬の特徴

● 緯糸よこに「からみ」とよばれる工夫がされているので、強さ、風合いの織味が良いのはこのためです。



● 手紡ぎの平織で緯糸よこは撚りがなくやや太くしてあるため、篋おさの打込みで布が重目となり、保温性が抜群なのはこのためです。

● 柄の構成は江戸文様縞と緋を主として「キリッとした」個性的な「オリジナル」が多いので着物通の方々に好まれています。

● 緯糸よこに撚りがない「からみ」の仕上げは、ある程度、横張りがありますので、身体にそぐい、裾のさばきも軽く、歩き易いのもこのためです。



## 目 次

---

1. 烏城紬伝承のあゆみ 四代目織元 須本雅子 …	1
2. 児島地方の地形と特色 ……………	4
旱害と干拓	
児島地方の地形と特色	
3. 児島の機業事情 ……………	6
迫川, 宗津の常袴	
4. 烏城紬のおこり ……………	8
宗津の三宅家代々の機織業とその推移	
機業農家と瑜伽参詣	
備前藩の農事に対するお触れ	
池田藩御物産になった小倉着尺	
自家商品の開発と商品の多様化	
三宅小三郎, 宗津から岡山へ	
木綿織物から絹織物へ	
烏城紬の誕生	
時代背景のまとめ	
5. 烏城紬の製造工程 ……………	16
原材料とその処理	
緯糸「からみ」糸の紡糸法	
烏城紬主要製造工程図	
6. 織機の変遷 ……………	23
機械の進歩	
7. 烏城紬の文様『縞』と商標登録 ……………	25
8. 烏城紬保存会のあゆみ ……………	26

---

## 1 烏城紬伝承の歩み

### 四代目織元 須本雅子

- 1940年 三代目織元三宅務の長女として岡山市に生まれる
- 1959年 岡山県立岡山南商業高等学校卒業後、日下商事に入社する
- 1963年 日下商事を退社  
須本日出夫と結婚し、神戸に転居する
- 1973年 家族とともに岡山に戻り、三代目織元である父の元で烏城紬を本格的に始める
- 1988年 岡山県郷土伝統的工芸品に指定される
- 1990年 第41回岡山県美術展覧会山陽新聞社賞受賞



- 1995年 岡山市立岡西公民館主催講座講師として後継者の育成を始める。1期生開講
- 1998年 岡山市立岡西公民館主催講座2期生開講  
「烏城紬守る会」発足
- 1999年 第50回岡山県美術展覧会県展特別賞受賞（次年度より委嘱となる）
- 2001年 岡山市立岡西公民館主催講座3期生開講  
岡山市立岡西公民館に烏城紬クラブ発足
- 2003年 岡山日日新聞賞受賞
- 2004年 岡山市立岡西公民館主催講座4期生開講
- 2007年 岡山市立岡西公民館主催講座5期生開講
- 2009年 織元工房の隣に烏城紬伝承館開設

2010年 岡山市立岡西公民館主催講座 6期生開講  
 国民文化祭（岡山開催）に参加  
 全国伝統的工芸品公募展中小企業長官賞受賞



2012年 岡山市立灘崎公民館に烏城袖クラブ発足  
 2013年 岡山市立岡西公民館主催講座7期生開講  
 全国伝統的工芸品公募展内閣総理大臣賞受賞



「からみ烏城」として商標登録（平成25年3月15日 登録第5565532号）  
 2015年 「烏城袖守る会」を「烏城袖保存会」に名称変更  
 2016年 岡山市立岡西公民館主催講座 8期生開講  
 2017年 岡山芸術文化功労賞受賞  
 2019年 岡山市立岡西公民館主催講座 9期生開講

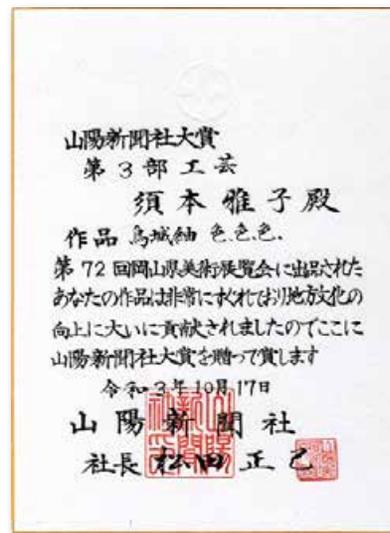
2020年 烏城紬伝承館を奉還町に移転（織元の工房と保存会の拠点を兼ねる）  
三井ゴールデン匠賞ファイナリストに選出

2021年 第72回岡山県美術展覧会山陽新聞社大賞を受賞



山陽新聞社大賞作品  
「色、色、色、」

2021年10月  
第8回烏城紬作品展  
岡山後楽園鶴鳴館にて



2022年 岡山市立岡西公民館主催講座10期生開講  
烏城紬保存会が第4回三井ゴールデン匠賞受賞  
烏城紬保存会が岡山県観光連盟より令和4年度観光物産事業功労者に  
選定される

(※) 博多や東京で開催された女性伝統工芸士展のイベントにも参加してきた

## 2 児島地方の地形と特色

### 旱害と干拓

江戸時代の前半には、灘崎村（現：岡山市南区宗津）一帯の山と海の間での狭少な地を古地と呼ぶ所もあった。干拓地に対するものであろうが、干拓事業は、遠く平安、鎌倉に遡る。歴史は常にこの干拓とともに周辺の環境と生活様式を変えて来たようである。

この沿岸の各村々の住民は、海への発展を願っていたが、干拓事業が進展するにつれて港湾はその機能を失い、藩幕政策と相俟って、干拓開墾への切換えの過程を辿っていくが、地形の特色として高くはないが多くの山々があり、峰筋が多く続いて区分された小低地が点在し、雨の少ない温暖地である。そのため、日本古来の農耕作業に対する制限は多かった。「日本豊年、児島ひでり」と言われる程雨が少ない処で、水田、畑作りは、乏しい天水のみには依存し難い土地柄であった。



往時の干拓地を想像しながら、たわわに稔った田園を見るとき、隔世の感がある

○参考までに烏城紬の関係地に近い開墾状況を見る。

文政7年	東新開	4町3段
同	西新開	3町5段7畝
慶応2年	東西沖新開	18町6段3畝
同	堅固新開	3町5畝

江戸初期、時の備前藩主池田光政公は、児島地方の恵まれない自然条件を緩和させるため、児島の郡奉行に命じて、郡内に溜池を完成させて旱害を防止し増産に努めさせた。さらに土地狭隘なため新田造成に力を入れ、遠浅の海岸を干拓して、水あれば水田とし、藩准を得て一致協力し湾頭陸岸に接続する部分から小規模の埋立てをしていく干拓事業を行なった。その成功地は、すべて畑地として綿の作付をしたのである。

また、水がないところは塩田として拡げていった。元来綿は塩分に強く、干拓地には稲に先立って栽培され、干拓地の初作となっているものである。そのため児島の西部は早くから綿栽培が干拓された新田で行なわれていた。児島東部、児島南部でも随所に綿の栽培がなされていた。必然的に豊富な綿花の収穫は織物の原料となっていく。

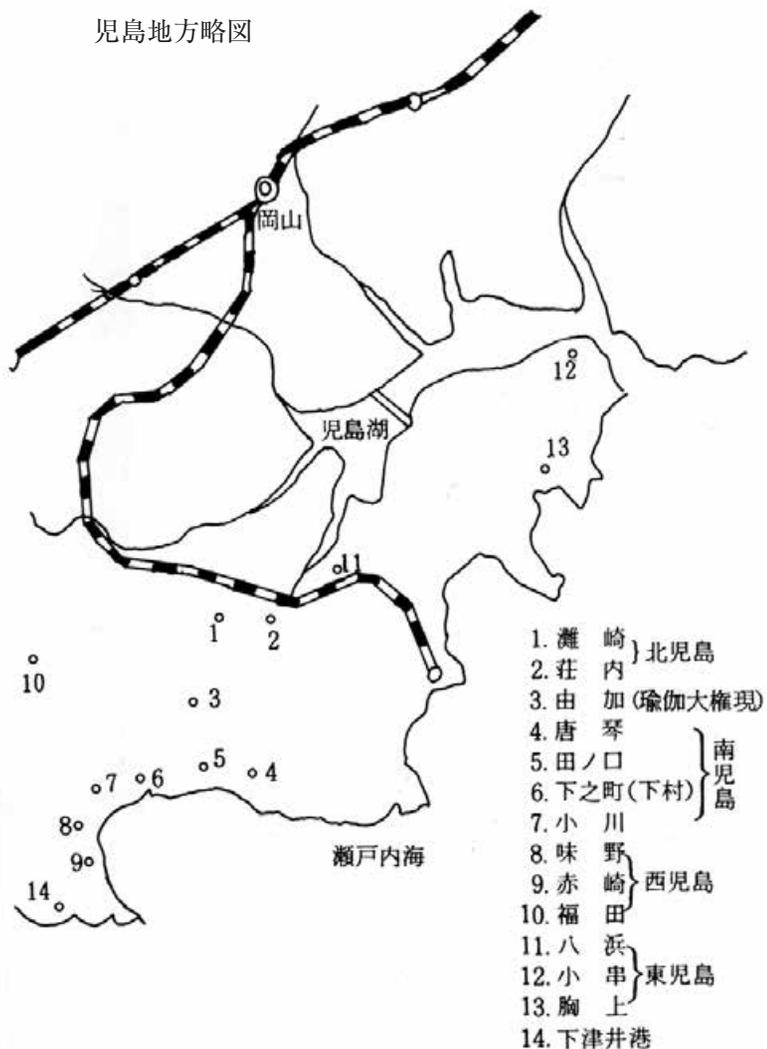
なおこの児島の西、連島は江戸時代に有名な手紡糸の産地でもあった。

### 児島地方の地形と特色

児島地方は右図の児島地方略図でわかるように、南は瀬戸内海、北は児島湖（元の児島湾）に挟まれた旧児島半島とその根幹部にあたる地帯を称している。

かつては児島郡としてこの辺りは特色ある地場産業（製塩、織物、漁業など）に恵まれた地域であった。市町村合併が活発に行われ始めて以来、玉野、倉敷、岡山の各市に合併されたため、現在の児島郡（平成7年消滅：平成の大合併により灘崎町が岡山市に編入）は極めて狭小な一区画を占めるに過ぎない。

児島地方略図



### 3 児島の機業事情

#### はざかわ 宗津の常袴

「備前織物今昔」に、「寛政の初年田ノ口において始めて眞田を製織し、その前後において、迫川（現：岡山市南区宗津）方面に常袴と称する袴地の製造が起り」とあることから、江戸時代中期後半既に綿織物業発展のきざしが見えていた。

※常袴 注記：図画1，2参照

一方，農家の中には同じそのころ山間と古地に小さな桑畑を耕し，養蚕にその活路を求め，機織を自家の副業としていた人達がいたことが窺われる。今も山間部に点在する桑畑のあと（灘崎町史）をみる事が出来る。

「備前織物今昔」には，その沿革の書き出しに「本郡の機織業はその起源最も古く300年余りの昔に出づ」と誌されている。今から300年余り前といえは，元禄よりまだ前のころである。現在も迫川，宗津，片岡の向背の山々に，くぬぎ，ならの雑木林が見られるが，美しい紅葉樹林の中でくぬぎの葉を食べる天蚕飼育の話の思い浮べたことである。

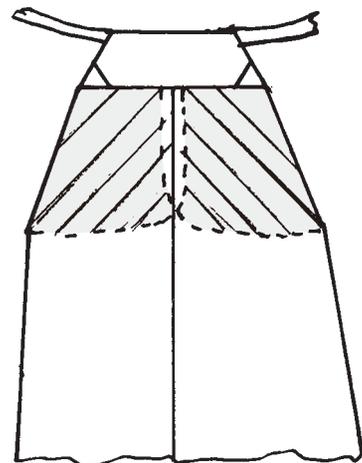


くぬぎ，ならの紅葉林

※注記：図画1



※注記：図画2



後ろから見た図形

前記の常袴を綿織物，後者の副業を絹織物と検証し推測することは容易である。

このように迫川の周辺を中心とし、宗津、片岡村の機業事情は江戸時代の中期寛政初年のころから進歩のきざしを見せ始め、埋立て地から収穫する綿が急速に増えてきた。この事情から寛政の後年になって、迫川、宗津村の機業農家では綿を原料とする常袴の生産がさかんになっていく。

それに引きかえ、もともと生産性の乏しい農家の細々とした副業的な絹織物は、次第にこのあたりから衰退し始めていくのであった。



常袴の背の部分から見つかった古文書  
寛政、天保、萬延の年号が見られる

ここで特筆しておかねばならないことは、下って安政のころになっても、南兎島では依然として真田、小倉地が織られていたが、それに比べ、迫川村、宗津村では常袴の外に木綿紬（着尺）織りの優れた技法が定着しつつあり、この村を発祥の地として抬頭していくのである。

※注記：図画の説明

- 1 この袴は迫川の井上家当主の祖父の遺品で、明治の初年のころ着用していたと言い伝えられる常袴である。素材は手紡糸太綿の9寸3分幅の袴地であるので、製作は安政のころと推測される。
- 2 上図の古文書は6ページ常袴の斜線部位に縫い込んであったものである。

## 4 烏城紬のおこり

### 宗津の三宅家代々の機織業とその推移

#### ■ 紬の源流と技法

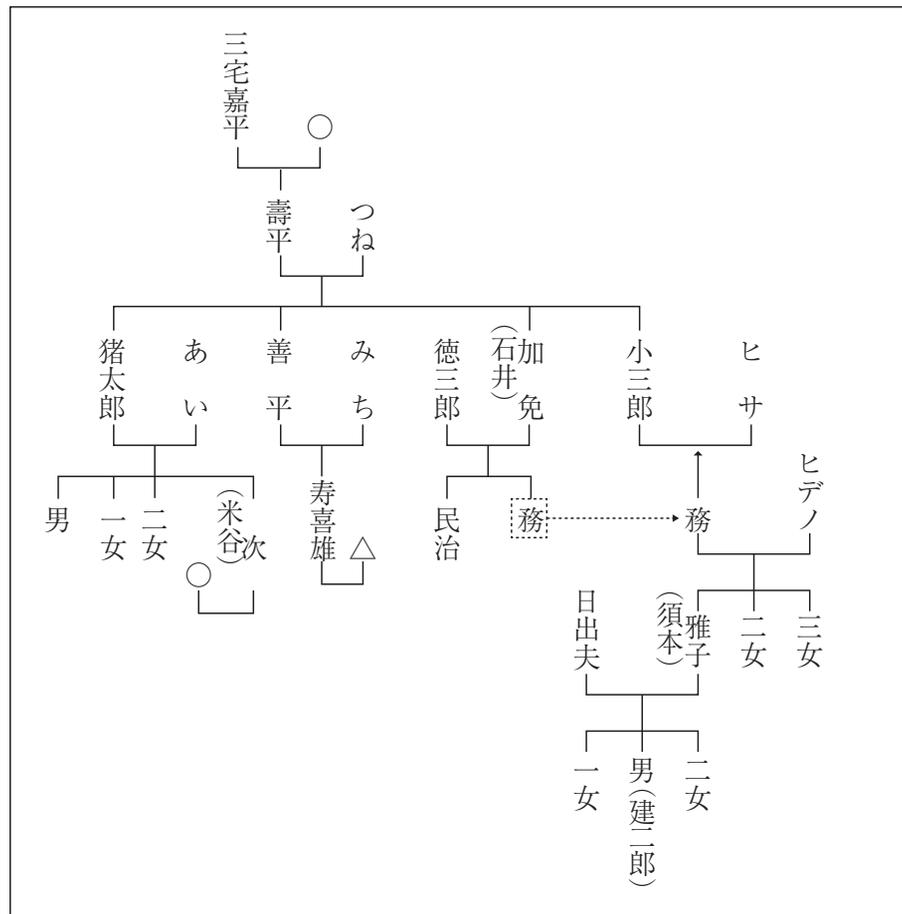
烏城紬は迫川村，宗津村の兼業農家で，寛政初年のころから，絹織物から綿織物へと長い機業の変遷の過程の中で培われて来た。

手織り（烏城紬の前身）の勝れた技法は，これら農家の人々に受け継がれ，根深く家々の土間に染み付き，独特の木綿紬を残し，烏城紬の源流となった。

#### ■ 三宅家の代々と推移

過去帳で寛政以前からこの宗津村に住んでいた三宅家の家系を次図のように見ることが出来る。

三宅家の家系図



初代嘉平以降，家業としての織物業は以下のように伝承されている。

### 三宅嘉平（染物・織物業）

寛政11年（1799）、児島郡灘崎村宗津に生まれる。当時宗津を始めとする北児島一帯は、木綿織物の産地として有名であった。嘉平一家はその中においてささやかに藍染と木綿織物を業としていたと、織元の父の従姉妹にあたる米谷 次は祖母つねから聞かされていたと話す。明治5年（1872）没、行年73歳。

### 三宅壽平（初代）

天保4年（1833）、嘉平の長男として生まれ、つねと結婚、猪太郎、善平、小三郎、加免の三男一女誕生、家業は先代に続いて藍染と綿織物をしていた。明治36年（1903）ごろ没と推測され、行年70歳。

#### ■機業農家と瑜伽参詣

化政期から明治初年ごろまで、近くの瑜伽大権現が大繁昌した。「瑜伽へ参ったら、金毘羅へ参れ、片方詣りはせぬように」と言われた程であった。由加山まで続く道中で、参詣客は土産物の真田紐をはじめ、反物や種々の綿織物を買求めた。このような安定した販路と相まって、壽平一家を始め、他の織物兼業農家も活況を呈していたようである。

#### ■備前藩の農事に対するお触れ

そのため天保改革期には、米作維持の政策上から農事本来の姿に帰ることを命じるお触れ〔別掲〕が、備前藩からしばしば公布されたほどであった。この様な藩政治の社会的、経済的な変化による浮沈の歴史が繰り展げられたものの、これまでに醸成された綿織物に対する基盤は強く、新しい製品即ち木綿紬の新製品開発に村民は努力を払い続けていた。

別掲

農業の透に一家一機づつ致候儀は勝手家内手間多きものは二機迄は差免其餘不相成勿論他家へ出し機いたし居候儀は差留候間決而賃織等致間敷候假令前々より下女下男仕来候ものたり共小倉真田致候ものは男女召抱候は不相成作方故障に相成及御噂右の通申談候上は機織は男女他国他郡は不及申町内方様へ機織奉公日傭等罷出候儀不相成事

天保十三年七月

とあり如何に郡内において綿織物が盛んであったかが推知できる。

## ■池田藩御物産になった小倉着尺

更に安政2年になって備前様即ち池田家岡山藩が一手に買い上げ、『池田藩御物産』として、小倉着尺は大阪の間屋へ送られるようになった。これによって同年正月織物の幅や長さを規定し、難疵物は出荷しないようにとの取り決め事の約定文が「別掲」の如く示された。

この「定」には、小倉着尺（太綿織）が一番に挙げられているように庶民の着物として、需要が多く大阪、その他の遠国売捌商人により売出され、その市場の活況の程が推測される。

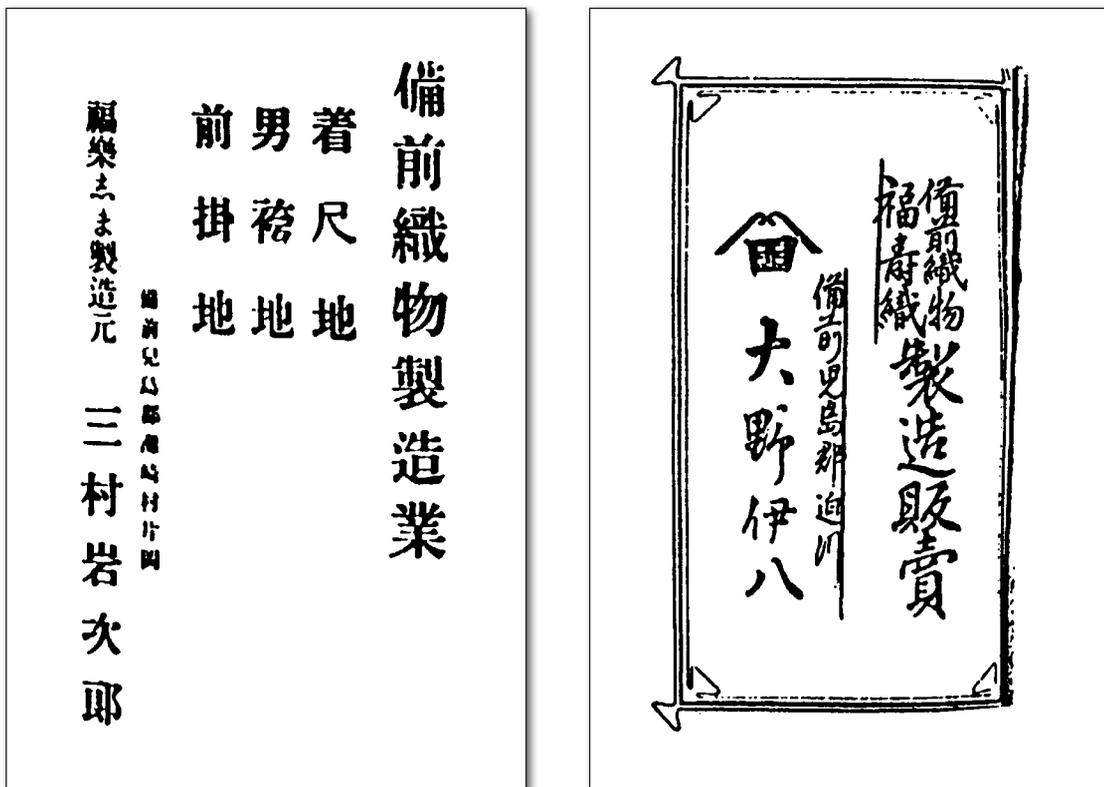
### 別掲

<p>御荷主御衆中 御中買御衆中</p>	<p>大阪 小倉織物荷請屋中 年行司</p>	<p>定</p>
<p>一、先年ヨリ兼テ申上置候通り、小倉織巾尺不同、疵難等御改可被下筈ノ処、近年又々猥リニ相成候、左候而ハ御互ニ直段不引合ニ可相成、其上荷物不揃ニ至リ候テハ歎ケ敷次第ニ付今般申談候改尺左ノ通り、</p> <p>一、小倉着尺ハ 二丈八尺、巾九寸五分</p> <p>一、袴 地 二丈、巾九寸三分、二丈五尺、巾同断</p> <p>一、男帯地 一丈物、巾五寸五分、二丈モノ、巾五寸</p> <p>一、女帯地 一丈五寸、巾八寸五分</p> <p>右ノ通り急度相改可被下、疵難奥落又ハ色変リ等、精々御吟味ノ上為御登被下度候尤モ右ノ訳御機屋御衆中へ駕ト御引合可被下候</p> <p>一、此度荷請屋中申談万端相改、嚴重正路ニ取引仕リ、弥増手広ニ相成候様仕度候間、向後疵難無尺物等有之候ハ、幾年立テ候共、代銀ニ利息相加へ御返却ノ上、其品差戻シ可申候、万一双方共不実ノ儀ハ勿論申合通り相背候方候ハ、早速年行可迄御申越可被下候、一統相談ノ上急度取締可申候、右御了知ノ上永統御取引仕度候</p> <p>安政二卯年正月</p> <p style="text-align: right;">以上</p>		

### ■自家商品の開発と商品の多様化

「児島の歴史」には、このころ商魂たくましい大阪商人の動きが記されているので、機業農家は、種々の影響を受けたものと想像される。三宅壽平一家の小倉着尺の製織は副業ながらも増産の一途を辿る。かたわら、紬風織とした商品の多様化を図る機運が高まってきた。その背景には綿紬織の優れた技法の工夫が拡がり、明治に入ってから自家製品には独自の商品名を付け競うようになった。壽平一家もこの風潮の中で、研究試行を重ね、一家は自家商品の開発に力を注ぎ、機業規模の拡大に一步を踏み出したものと思料する。

下の「商標」は明治半ば以降の買継ぎ商や卸問屋・製造元が表看板として、店頭に掲げたものと推量できる。このほか、都乃織・結城縞等の商品も迫川・宗津から大阪へ多く売出されたようである。



#### 三宅猪太郎（農専業）

壽平の長男として生まれ、あいと結婚し一男三女誕生、病弱なため専ら農業に従事していた。明治45年（1912）没、行年42歳。

三宅善平（機織業と農業）

三宅小三郎（二代）

三宅善平は明治5年（1872）、壽平の二男として生まれ、兄猪太郎が病弱なため代わって弟小三郎とともに、先代の藍染と織物業を継ぐ。昭和4年（1929）没、57歳。

### ■三宅小三郎，宗津から岡山へ

三宅小三郎は明治10年（1877）、壽平の三男として生まれ、次兄の善平とともに先々代からの家業である藍染と機織業を継ぐ。



大正元年当時岡山市中には染織業者は皆無であったため、岡山県や織物業関係者の勧奨により、小三郎は家業を次兄の善平に任せ岡山市小野田町：岡山たばこ製造所跡（現：岡山市北区京町）へ宗津から転出したのであった。岡山たばこ製造所跡地には織機20台を使用し縞木綿の袴地、木綿着尺を織っていた。これらは先代の織っていた品物と同類であった。

### ■木綿織物から絹織物へ

大正に入って昔からの手紡糸による木綿織物は、紡績糸による木綿糸織物より地厚いため、大正時代のロマンには受け入れられず、着尺地として需要が次第に減少し始めた。そのため綿糸から絹へ素材の変更を考えるようになった。

### ■烏城紬の誕生

小三郎が岡山市へ出るようになった経緯は、備前織物同業組合の設立に力のあった迫川の大野卯吉（小三郎の仲人）に、県からの勧奨があったのではないかと考えられる。

工業試験場へも出入りしていたという小三郎は、着々と業界に自歩を踏出してゆく。又、このころ小学生用運針用布に色糸を織り込むことを工夫するなどの実績があることから、進取の気性に富んでいたこともわかる。

大正5年岡山たばこ製造所が住居地を売却したことにより、小三郎は工場を本通りに移転する。

大正7年工場を大雲寺町（現：岡山市北区表町）に移転する。移転の理由は本通りの周辺に商店が増加し、機織の騒音を懸念したことによる。

大正10年はたせに撚り<sup>よ</sup>をかけて<sup>たて</sup>経糸、緯糸<sup>よこ</sup>に使用し厚物を織った。絹織物の研究に更に力を入れる。大正6年ごろ大野卯吉の妻の叔父が米国から帰国し岡山市天瀬で槌屋合

資会社を設立。廃品回収業の総元締めを始めたところ、福井から送られた屑糸の中にはたせが目立ったのでこれを整理し名古屋から玉糸を取り寄せ、からませて織り始めた。

大正12, 13年経糸を細くし, \*はたせ, 乱れ, 虫喰い等問屋で購入できるものをからませ使用した。当時セリプレん糸をすすめられたが, もつれが著しく整理後の有効量が少ないため採算がとれない理由で使用にふみきれなかった。



宗津の三宅家の在家は今はなく  
その跡地には春秋の草が生い茂る  
むかし藁屋の「がんぶり」瓦が  
半ば埋っているのがあった

絹として生糸は高価であるから、はたせ、虫喰い、乱れ、等の屑生糸を用いることに着目した小三郎は、これが端緒となって「からみ」糸を考案し、烏城紬の特徴と他の紬と異なる点を強くイメージ付けた。更に先々代から伝承を保ってきた、寛政以来の小倉着尺の優れた技法、工法も加わり、江戸時代の風格と余韻をもつ烏城紬は名実ともにここに開花していくのであった。

それに続き先代から工夫を続けていたところの緯糸を「からみ」とする、装置の整糸繰機（製造工程の項で詳しく説明）をも改良を加えて実用化し、独特の工法による烏城紬の誕生を見たのである。小三郎は後継者なきため、姉の二男務を養子とし、織物工場の経営と共に昭和6年設立の烏城絹織合資会社の技術担当責任者となった。明治、大正、昭和を一筋に機織業に没頭し、烏城紬の伝統を岡山県唯一の絹織物として残した。昭和21年（1946）没、69歳。

※注記：はたせ、虫喰い、乱れについてはP15参照

### 三宅 務 (三代)

明治38年（1905）、石井加免の二男として生まれ、22歳で小三郎の養子となる。養父小三郎とともに織物業に従事していたが、養父没後は烏城絹織株式会社設立と同時に勤務することとなった。数年後同社は閉鎖され、以来自営で烏城紬の生産に従事し伝統を守り続けていた。ヒデノと結婚し三女誕生、平成5年（1993）没、88歳。



### 須本雅子 (四代)

昭和15年（1940）、務の長女として生まれ、須本日出夫と結婚し、一男二女がある。三代目の父は高齢のため、昭和45年から烏城紬織元の後継者として織りの伝承を続けている。

全ての工程を一人で行うことを基本としながら、草木染を取り入れたり、時代に合った柄の工夫を行ったりしながら伝統を守ってきた。伝統や技術を後世に伝えるため、平成7年より岡西公民館で主催講座を始める。主催講座の卒業生を中心に立ち上げた「烏城紬伝承館」での指導も続けている。

### 須本建二郎 (五代)

昭和41年（1966）、須本雅子の長男として生まれる。母の仕事を手伝っていたが、令和4年より五代目として、本格的に技術の習得に取り組む。

#### ■時代背景のまとめ

寛政のころから、三宅家の織物一家について関わって来た社会的浮沈の背景の主な事跡は「烏城紬のおこり」の項で述べたとおりであるが、次に大きく3つの流れにまとめる。

- (1) 三宅嘉平が藍染と木綿織物を家業としていた化政期には、灘崎一帯で着尺地、袴地が盛んに織られていたとする記録と、関係者の聞き伝えとにより、嘉平時代の染織業を郷土産業史上に確認することが出来た。
- (2) 三宅嘉平、壽平、善平、小三郎、務、雅子にわたり、染織を代々家業としていることが明らかであった。

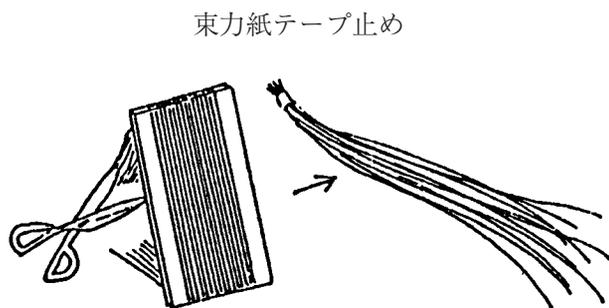
(3) 染織業の内容は小三郎時代の初期まで木綿手紡糸を用いた綿織物であった。以降は絹の手紡ぎによる絹織物に変わった。即ち三宅家5代にわたる前半は、綿の栽培地で手紡糸が入手しやすい環境にあって、手織木綿の需要も多かった時代であった。しかし後半は時代の流行の推移のために、手紡糸による木綿織の需要が減じたため、絹繊維で入手しやすいはたせ、乱れ、虫喰い、セリプレん糸等を再利用して絹の手紡糸を工夫し、紬織物を織り始めた。

「手紡ぎの糸を用いて手織とする」という原則の下に社会の状況に応じ織糸を工夫し、時代の要請に応える織物を今日まで織り続けている。

産業用ロボットの出現などで生産技術の革命が急テンポで進み、「物作り」のプロセスがますます人間の手を離れて行われるようになった。「物作り」は次第に機械生産へと変わり、人間不在の生産システムになりゆくこの時世に、高々と「手作り」伝承の灯りを掲げる姿は注目に値することではなかろうか。

#### 注記

- ・「はたせ」 反物を織る時、織機にかける経糸は織り上げる反物の長さより三尺くらい長く用いているため、織り上がったあと織機から反物を取りはずすと経糸は反末二尺くらい残っている。それを裁ち切ったものをはたせという。
- ・「乱れ」 生糸の<sup>かせ</sup>総から糸にするとき、生糸が絡み合っているものを乱れという。
- ・「虫喰い」 生糸の<sup>かせ</sup>総を保存している間に虫害を受け、生糸が途中で切れ損傷したものを虫喰いという。
- ・「セリプレん糸」（プロセス検査で出た糸） プロセス検査とは38cm×18cmの黒布貼平板に生糸を平行等間隔に巻き、糸条斑、類節等を検査することである。それに使用後の糸を切開き、数束、束ねここでは緯糸の原料とする。  
(現在はセリプレん糸が手に入らないため、<sup>かせ</sup>総になった生糸を半分に切って使用している。)



セリプレん糸

## 5 烏城紬の製造工程

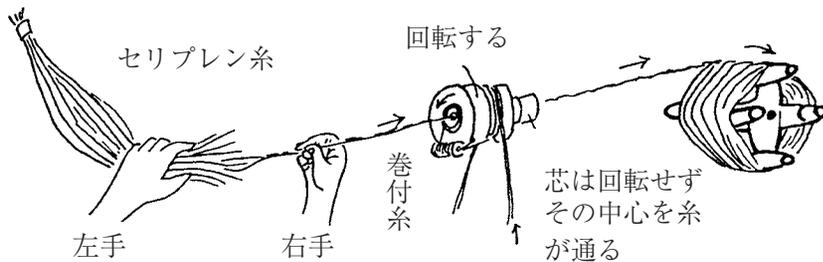
### ■原材料とその処理

経糸は21中程度の<sup>もろより</sup>諸撚絹糸である。

緯糸はセリプレ<sup>かせ</sup>ン検査後の屑糸（現在は<sup>かせ</sup>総になった生糸を半分に切って使用）と21中双の巻付糸との、つむぎ「からみ」糸である。

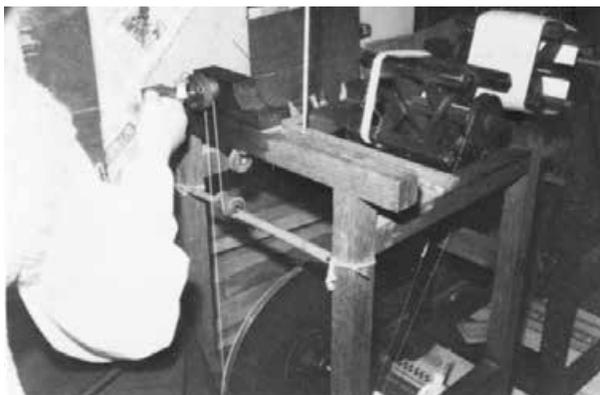
### ■緯糸「からみ」糸の紡糸法

図1のように左手に生糸を持ち、右手の第一指と第二指とで巻付糸に軽い撚りをかけながら、生糸の端からみ合わせ、適当な太さになるよう生糸の本数を加減しながら撚りつなぐ。撚りつなぎの際、右手で軽く撚りをかけるが、糸全長から見ればほとんど無撚りに近い。その際、糸に抱合性を維持するため、整紡糸機の回転口に、21中双を巻付けた「ボビン」を回転させ、コイル風にかからませる。



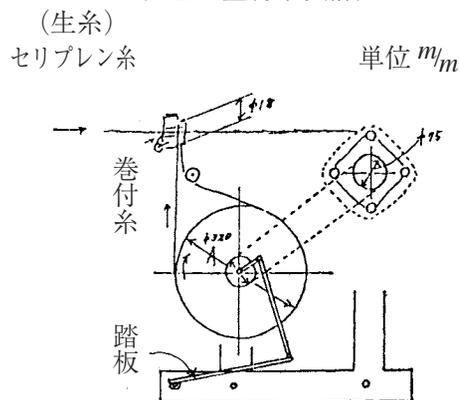
巻付け糸は21中双。織物面では見えない

図1 緯糸の紡糸法

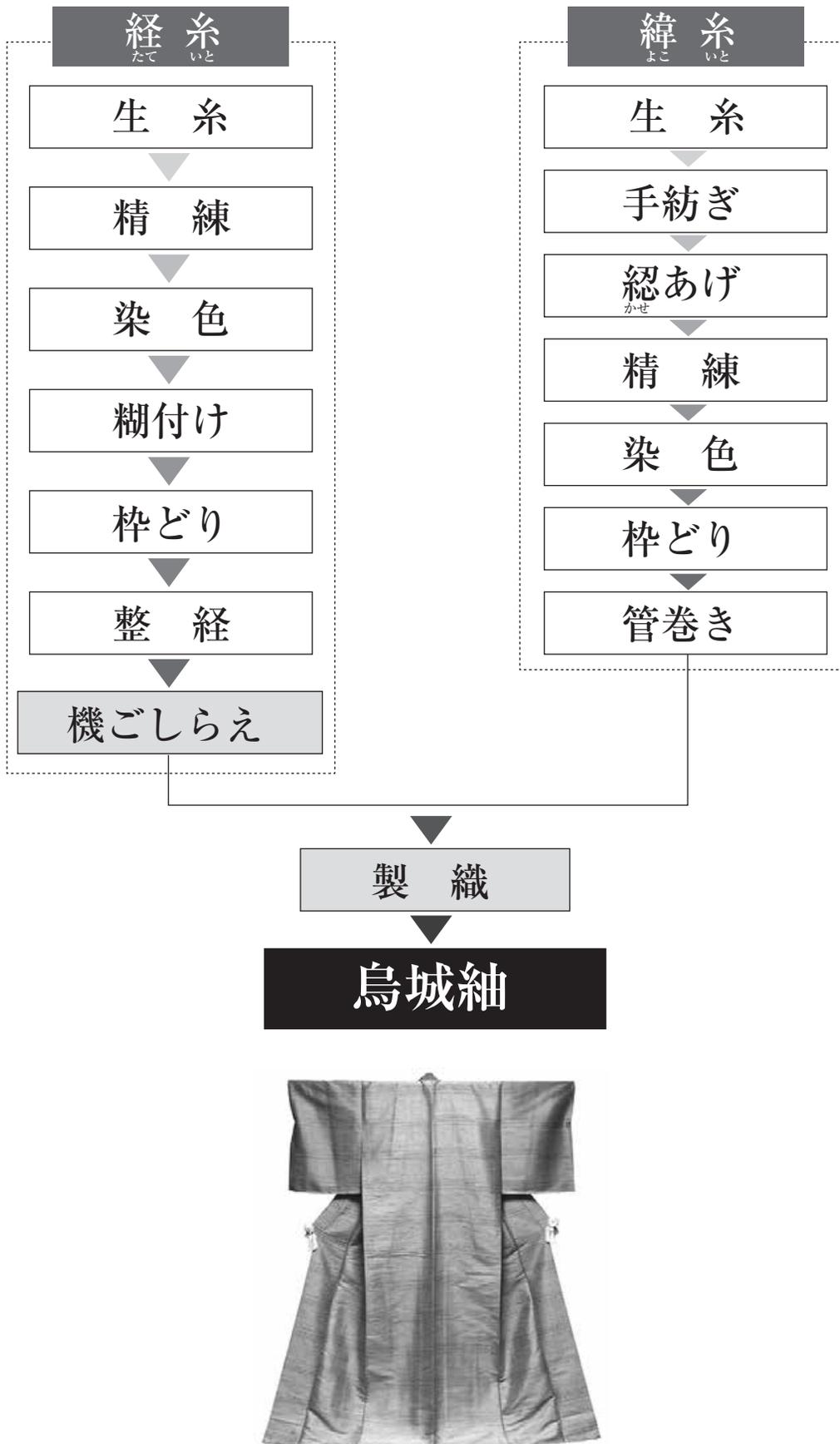


「からみ」糸を作る整紡糸機

図2 整紡糸機構図



## 烏城紬主要製造工程図



## 経糸 (たていと)

### 精練

経糸は袋に入れず「さお練り」をする。<sup>かせ</sup> 綯の輪の中に棒を通して、温度を沸騰前の程度に加熱し、洗濯ソーダと針状マルセル石鹼を溶かした湯の中で<sup>かせ</sup> 綯を回しながら練り上げてゆく。手で糸をつまみ糸の中の不純物の有無を確かめながら5分程で除去するようにする。その後、水を張った大たらい（おけ）の中で振り洗いを数回して絞る。同じ作業を繰り返す、水ににごりがなくなってから、十分に絞る。



### 染色

草木染，または化学染料を使用する。

〔草木染〕<sup>かせ</sup> 綯を棒にかけ、染料を3～4回煮出して取った染液に糸をつけながら回転させ、上下に動かしながら液の中で煮染めする。染液の温度に気をつけながら（60度位まで）15分から20分位糸を動かす。火を止めた後、染液が冷えるまで糸をつけておく。軽く絞って媒染液（主にアルミ媒染か鉄媒染）につける。染液を温め、水洗いした糸をもう一度煮染めし、染液に浸しておく。水洗いした糸をソーピング剤を溶かした液にしばらくつけた後、水洗いする。

〔化学染料〕熱湯で溶かした染料を木綿の布で濾しておく。濾した染料を、鍋に入れた水に混ぜて染液を作り、<sup>かせ</sup> 綯を棒にかけて動かしながら煮染めする。染料をしっかりと糸に吸わせるために氷酢酸を加えて煮染め続ける。糸が染まったら、酢酸の匂いが消えるまで水洗いする。

糊付け

経糸の枠取りをし易くするための工程である。少量の片栗粉を水に溶かして加熱し、沸騰したら1, 2滴サラダオイルを加える。それを水で薄めてから経糸を浸し、十分しみこませたのち、絞る。総を乱さないように干して乾燥させる。

枠どり

経糸準備の工程である。織機にかける反物に必要な長さを小枠に巻き取る。反物の幅や縞に応じて小枠の数は異なる。



機にかける長さの経糸を小枠に巻き取る

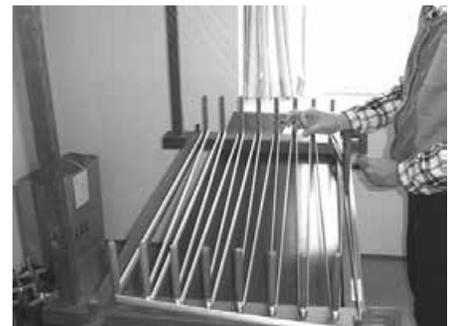
整経

枠に巻き取られた経糸を、整経機に掛ける。

経糸を必要な長さ和本数に揃え着尺巾に整える



織元の整経機



整経機

機ごしらえ 経糸

## 緯糸 (よこいと)

### 手紡ぎ

生糸の束から数本ずつ引き出しながら適した太さに束ね、紡ぎ機で絡み糸をコイル状に巻き付けて緯糸を紡ぐ。



### かせ 総あげ

烏城紬の行程の1つで、1反に必要な緯糸を等分量に分けた<sup>かせ</sup>総を8~12作る。柄ゆきや図案により<sup>かせ</sup>総の数も変化する。



### 精練

染色をする前の工程である。寸胴鍋に8割程度水を満たし、加熱する。洗濯ソーダ、マルセル石鹼を適量入れて溶解させる。「かせあげ」をした糸の輪に太綿糸を通し、まとめて木綿袋の中に入れる。加熱している寸胴鍋に木綿袋を入れ、袋の中の糸がゆったりと広がるように、棒でつきませながら、沸騰するのを待つ。沸騰してくると、溶液が噴きこぼれないように注意しながら、40分~45分間、棒で袋を上下につきませ、7~10分ごとに更に攪拌を繰り返す、糸の中に含まれる不純物（セリシン）が十分、湯の中に除去できるようにする。水で冷やしながら袋から緯糸を取り出し、大だらいの中で水を流しながら振り洗いする。石鹼分がなくなるまで3回ぐらい洗う。



緯糸の重さに応じて、洗濯ソーダと針状マルセル石鹼の重さを測る。8~12<sup>かせ</sup>に分けた緯糸を木綿糸でまとめ、木綿の袋に入れる。洗濯ソーダと針状マルセル石鹼を溶かした液の中に緯糸の入った木綿の袋を入れ、棒でつき混ぜながら煮る

染色

草木染，または化学染料を使用する。

[草木染] <sup>かせ</sup> 総を棒にかけ，染料を3～4回煮出して取った染液に糸をつけながら回転させ，上下に動かしながら液の中で煮染めする。染液の温度に気をつけながら（90度位まで）15分から20分位糸を動かす。火を止めた後，染液が冷えるまで糸をつけておく。軽く絞って媒染液（主にアルミ媒染か鉄媒染）につける。染液を温め，水洗いした糸をもう一度煮染めし，染液に浸しておく。水洗いした糸をソーピング剤を溶かした液にしばらくつけた後，水洗いする。

[化学染料] 熱湯で溶かした染料を木綿の布で濾しておく。濾した染料を，鍋に入れた水に混ぜて染液を作り，<sup>かせ</sup> 総を棒にかけて動かしながら煮染めする。染料をしっかりと糸に吸わせるために氷酢酸を加えて煮染めを続ける。糸が染まったら，酢酸の匂いが消えるまで水洗いする。



緯糸を染液につけながら回転させ，上下に動かし煮染めをする

枠取り

染色した緯糸を一総ずつ小枠に巻き取る。

管巻き

杼で織るために，小枠から小管に巻き取る。



製織

へ

## 機ごしらえ 経糸

経糸を織機の千切に巻き付けて、<sup>そうこう</sup> 綜統と<sup>おさ</sup> 箎に通し織り始める準備をする。



## 製織 経糸・緯糸

織機は、高機で、すべて手織りである。シャクリ機を使っていた時代もあるが、現在はすべて<sup>ひ</sup> 杼を手で操作する手織りである。



織機の経糸を通した<sup>そうこう</sup> 綜統を足で上下に開口して、<sup>ひ</sup> 杼の中に緯糸の管巻きしたものをに入れて手で走らせて<sup>おさ</sup> 箎で打ち込む。

## 烏城紬



## 6 織機の変遷

安政6年（1859）鹿児島藩主島津斎彬が買入れたイギリス製の水力による帆布を織る力織機2台が最初のものでされている。絹織物においても京都では明治19年フランスから蒸気による力織機を買入れて使用してみた。また、桐生でも明治22年にアメリカ製の力織機60台を入れている。このように外国製の力織機を導入したことは、これまでの日本手織（手機械）に大きい刺激と影響を与えた。手織を水力によって自動化することが工夫された。その初めは明治10年東京での第1回内国勸業博覧会に出品された水車織機（水力利用の力織機）であった。

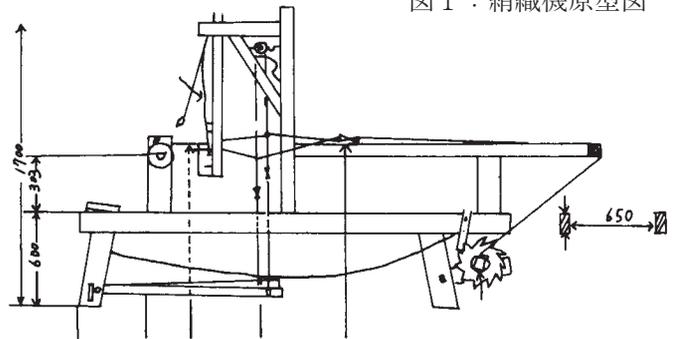
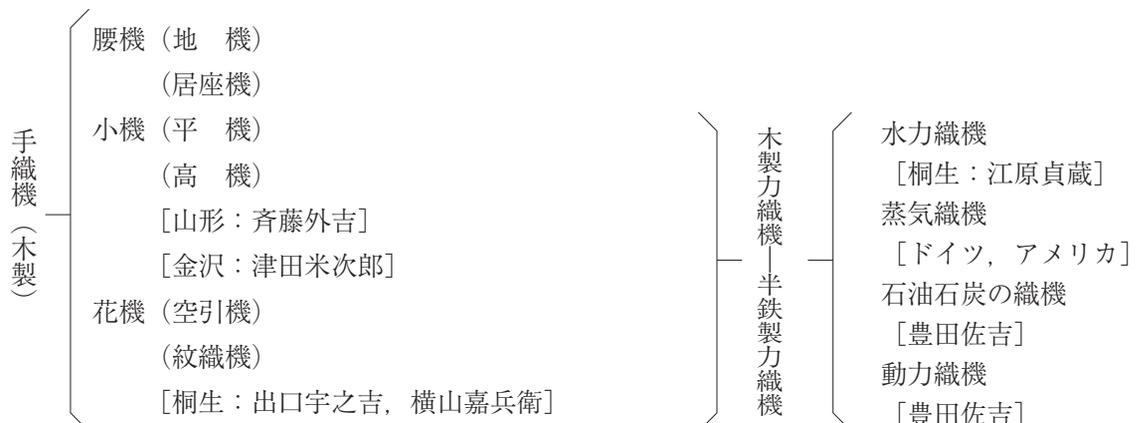


図1：絹織機原型図

絹織物用としては、明治31年に山形県の齊藤外吉が考案した齊外式という力織機があるが、明治33年に金沢の機大工の子津田米次郎がこれを改良して津田式を完成した。

ところで半木製また木製では能率が悪いものであったから、明治43年に八幡製鉄所が操業を開始して、いろいろな鉄製織機の生産も容易可能にした。豊田佐吉の大正5年からの研究が実りを結んで同15年に豊田式自動織機が完成した。それは1人で15台も受けもてる性能をもっていた。動力の電化によって、この発明考案は画期的なものとなる。

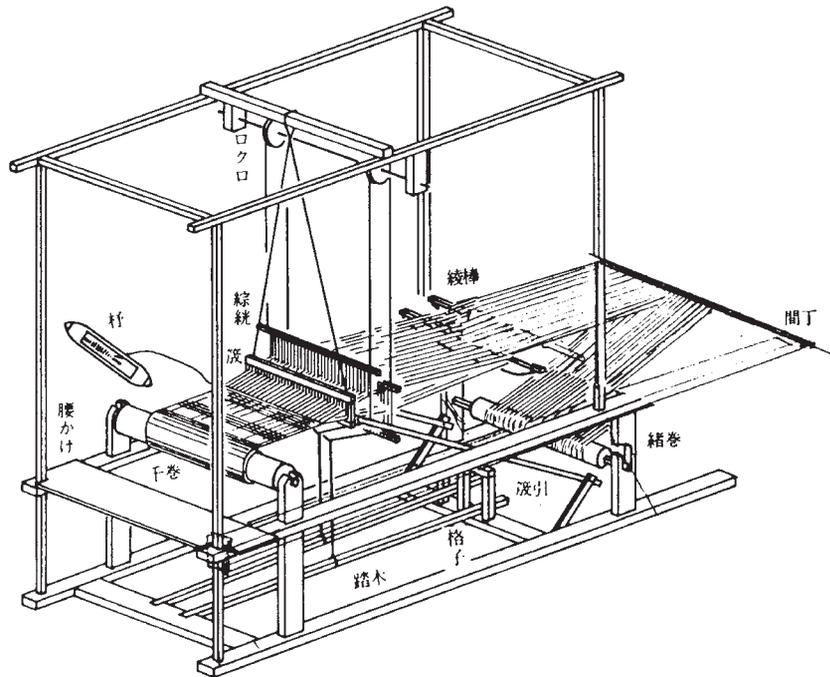
### ■機械の進歩（人名は織機を考案した貢献者）



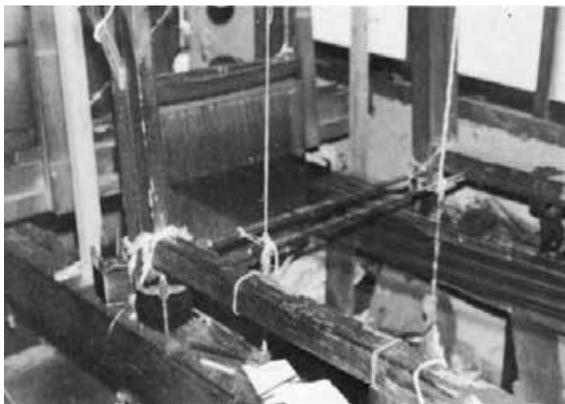
足踏機 { 原型織機，1802年イギリス人の発明による。後明治20年頃から日本各地の機業地で考察され，明治34～大正期を通じ，水力，水車，電力の利用出来ない地方には大いに利用され，20世紀に入り電力事情が驚異的發展を遂げたため，この原型織機が急速に自動化した。

- 図1の絹織機原型図は烏城紬織元が現在使用している江戸時代の出し機（高機）で、図2高機構造図は小千谷紬のもので、2台目のものとして烏城紬織元では、現在両機を使用している。
- 池田藩政時代、「出し機」に使用されていたと思われる頑丈な仕組みの高機である。ボタン（飛杼）は明治以降に取り付け改良したものである。
- 「出し機」とは藩政時代に兎島半島内では資力のある農民階級はかなりの織機を所有して農家に貸与した制度が、明治から大正の初期まで続いたといわれる。三宅氏所用の織機が宗津在住当時の出し機の貴重な遺品であることは推察できる。

図2：高機構造図



### 出し機（江戸時代）…織機貸与制度



迫川，宗津村にあった織機の保有数は詳しい記録はないが，中島家の文書によると天保以降兎島郡内には，織機約3000台があったという。このような盛んな兎島織産基盤の中には幾つかの生産構造があった。

そのひとつが出し機制度である。前に述べたように，資力ある織元から零細農家層へ貸与し，原料や必要な材料も織元が出し，織出した製品はすべて織元がとり，織賃金だけを受取る制度である。

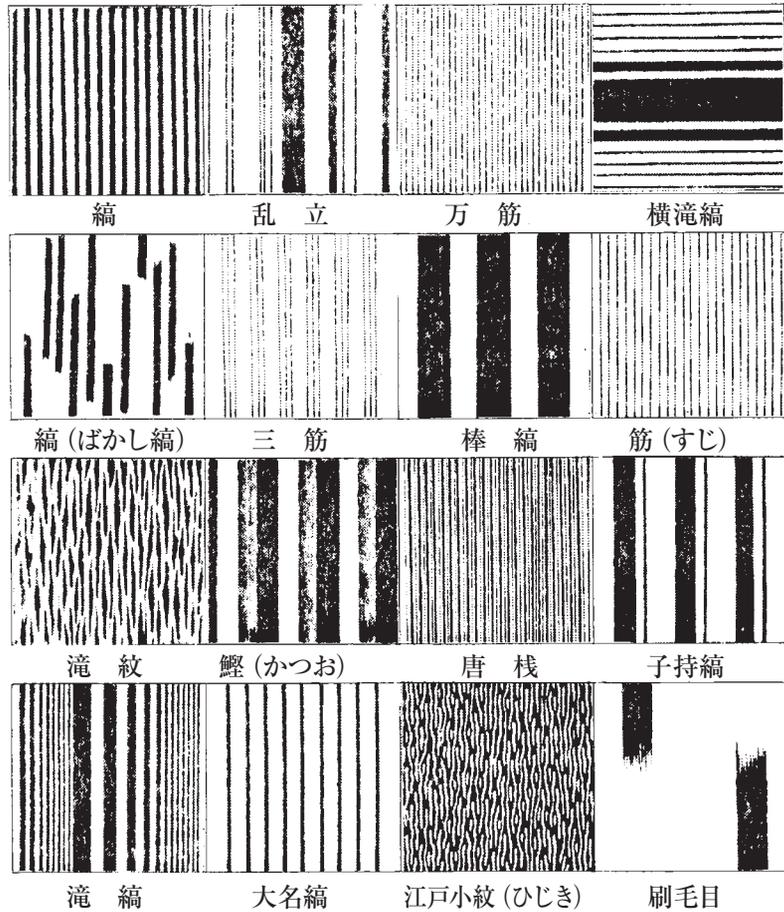
## 7 烏城紬の文様『縞』と商標登録

### ■「縞」のこと

東南アジアの島々から渡って来た布は、ほとんどが線条文であった。いつかこの文様を「島」もの、後には「縞」と呼ぶ様になった。

そして江戸時代、綿は下級武士や庶民の着物として親しまれた。特に江戸後期には、右図のような縞文様のキリッとした持味が、江戸っ子のさっぱりした気性に合って、大流行して明治まで続いたという。

烏城紬の織元でも、この文様の外20銘柄余を織り縞帳として保存している。



江戸時代の縞文様

### 商標登録



登録番号	登録第 5565532 号
商 標	からみ烏城
出 願 日	平成 24 年 10 月 15 日
登 録 日	平成 25 年 3 月 15 日
令和 4 年 10 月 14 日	登録更新済み



## 8 烏城紬保存会のあゆみ

### 第一期

#### ■昭和49年5月（1974）

##### 『岡山烏城紬保存会』設立

1971年以来、調査研究のかたわら織元の手伝いをされていた水田勝夫氏を中心に、当時黒石株式会社常務取締役であった井上五郎氏、黒石株式会社社長であった黒石久夫氏の協力を得て設立。



#### ■第1回全国伝統的工芸品展

##### 昭和52年度（1977）

烏城紬保存会の出展作品は優秀と認められ、岡山県知事から賞状並びに記念楯を受賞する。



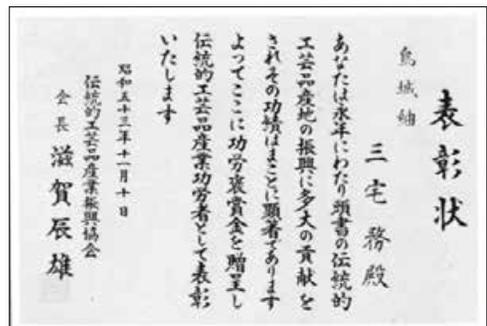
#### ■第2回全国伝統的工芸品展

##### 昭和53年度（1978）

烏城紬織元 三宅 務は出品の作品優秀と認められ、岡山県知事から賞状並びに記念楯を受賞する。

#### ■昭和53年11月（1978）

伝統的工芸品産業振興会から、織物部門において、烏城紬、三宅務は地域産業の高揚と技術後継者の育成の功をたたえられ、伝統的工芸品産業功労者として表彰される。



■このように全国伝統的工芸品展には、毎年連続して出展の栄を賜っております。

- 全国伝統的工芸品展（毎年11月東京）
- 東京、大阪国際見本市へ出展（毎年4月中旬）
- 岡山県の主催とする、岡山県伝統的工芸品展（毎年11月）
- 岡山市経済局観光物産課の推進する「おかやまの観光と物産展」（毎年6月）

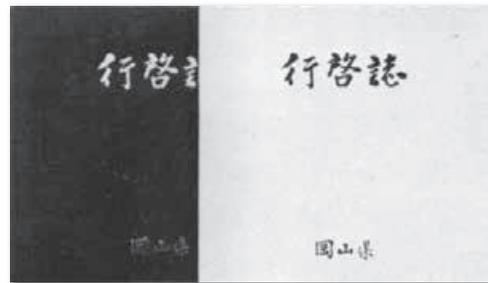
■昭和56年 1月12日 (1981)

岡山商工会議所創立100周年記念事業の一つである「岡山商工会議所百年史」発刊の際、装丁に烏城紬を使用することで協力したので、伊原木一衛岡山商工会議所会頭から烏城紬織元三代 三宅 務，烏城紬保存会会長水田勝夫に感謝状がおくられました。



■昭和63年 4月10日 (1988)

世紀の大事業である瀬戸大橋の開通式典に皇太子殿下，同妃殿下の御臨席を賜り，併せて地方事情御視察のため県内各地を行啓いただきました。右の写真はそのときの行啓記念誌です。なお，その装丁に烏城紬が使用され，織元一同光栄に存じております。



■昭和63年 4月 (1988)

岡山県内において製造され，郷土の自然と暮らしの中で育まれてきた郷土伝統的工芸品として指定を受けました。指定の条件は次の通りです。

指定品の名称	烏城紬。
指定番号及び年月日	工第5号 昭和63年4月8日。
技術又は技法の内容	①先染の平織りとす。 ②緯糸を太目に整え，織物を重目にする事。 ③緯糸は「からみ」と称する無撚の糸を使用する。 ④かすり織物には「手くくり」の作業をする。
使用する原材料	生糸（セリプレん糸）又は屑生糸を使用する。
製造する地域	岡山市

■1990年 岡山県美術展

山陽新聞社賞 織元 須本雅子

## 第二期

- 1998年 岡西公民館主催講座生を中心に「烏城紬守る会」を新しく発足
  
- 1999年 岡山県美術展  
県展特別賞 織元 須本雅子
  
- 2000年 第1回烏城紬作品展（於：岡山シンフォニービル）
  
- 2003年 第2回烏城紬作品展（於：早島町いかしの舎）
  
- 2006年 第3回烏城紬作品展（於：早島町いかしの舎）
  
- 2009年 「烏城紬守る会」の拠点となる「烏城紬伝承館」を立ち上げる。  
織元の工房の隣にあり、「烏城紬守る会」の拠点兼共同工房の位置づけ。  
岡山県美術展  
県展特別賞 秋山順子「古都の音」  
第4回烏城紬作品展（於：早島町いかしの舎）
  
- 2010年 国民文化祭（岡山開催）に参加  
展示に加え、巾着作りのワークショップを行う。
  
- 2012年 第5回烏城紬作品展を開催（於：倉敷物語館）
  
- 2014年 岡山県美術展  
山陽新聞社賞 日原資子



山陽新聞社賞  
日原資子「なんてん」

### 第三期

- 2015年 「烏城紬守る会」から「烏城紬保存会」へ名称を変更する。  
第6回烏城紬作品展を開催（於：岡山後楽園鶴鳴館本館）  
岡山県美術展  
入 選（2名）

- 2016年 岡山県美術展  
入 選（1名）

- 2017年 岡山県美術展  
県展賞 柏内典子  
入 選（1名）

県展賞  
柏内典子「五月の陽光」



- 2018年 第7回烏城紬作品展を開催（於：岡山後楽園鶴鳴館本館）  
西日本豪雨被災地支援を兼ねたクルミボタン作りのワークショップを行う。  
岡山県美術展

- 県展賞 鈴木千恵  
奨励賞（1名）  
入 選（2名）

県展賞  
鈴木千恵「精彩」



第7回鳥城紬作品展 (岡山後楽園鶴鳴館本館 2018年10月)



■2019年 岡山県美術展

県展賞 大賀節子  
奨励賞（1名）  
入 選（1名）

県展賞  
大賀節子「竹の歌」



■2020年 烏城紬伝承館を奉還町に移転する。  
四代目織元須本雅子が三井ゴールデン匠賞の  
ファイナリストとなる。



■2021年 第8回烏城紬作品展を開催  
（於：岡山後楽園鶴鳴館本館）

岡山県美術展

山陽新聞社大賞 織元 須本雅子  
岡山県知事賞 日原資子  
県展賞 柏内典子「カノン-梅-」  
入 選（1名）

岡山県知事賞  
日原資子「春の野辺」



■2022年 三井ゴールデン匠賞受賞  
岡山観光物産事業功労者を受賞  
岡山県美術展

県展特別賞 大賀節子  
奨励賞（1名）  
入 選（1名）

県展特別賞  
大賀節子「想-残り糸も愛し」



■2023年 現在43名の保存会メンバーが活動している。

(※) そのほかにも、地元百貨店等のイベントにも参加している。

第8回鳥城紬作品展（岡山後楽園鶴鳴館本館 2021年10月）



## おわりに

須本先生が織元として一人で守って来られた烏城紬，岡西公民館が主催講座を開いてくださったお陰で，私たちも烏城紬へのご縁をいただきました。

ご自分の制作時間を割いて，熱心に教えてくださる先生の背中を見ながら，生半可な気持ちで取り組んではいけないという気持ちが強くなりました。気持ちはあっても，全ての工程を一人で行う烏城紬の技法を習得することは簡単ではありません。一番大切な糸紡ぎは，やればやるほど奥が深いとさえ感じます。それでも，難しさ以上に烏城紬の魅力を感じながら楽しんで作業に取り組んでいます。

また，この冊子を編集する機会をいただいたことで，烏城紬の歴史を再認識することができました。

今後も織元を盛り立てながら，烏城紬に真摯に取り組んでいきたいと思っています。そして，岡山の郷土伝統的工芸品である烏城紬が後世につながることを心から願っています。

いつも熱心に指導してくださる須本先生，主催講座を開いてくださった岡西公民館様，「烏城紬保存会」の名称を使う許可をくださった水田様のご家族，ホームページを作製してくださったマルミミ様，撮影に協力してくださったニッコールクラブ岡山支部様，助成してくださった福武教育文化振興財団様に心から感謝申し上げます。



岡山後楽園 鶴鳴館本館にて

烏城紬保存会

烏城紬 - 伝統に生きる -

編集

五代目織元 須本建二郎

副代表

大賀 節子 日原 資子

編集委員

秋山 実穂 金子由美子

佐々木恵子 鈴木 千恵

寺谷久美子 難波美恵子

藤川 礼子 溝手 祐佳

三村 由

---

---

岡山県郷土伝統的工芸品

# 烏城紬

－伝統に生きる－

発行日 令和5年8月20日  
発行所 烏城紬保存会  
岡山市北区奉還町4丁目10-7(工房)  
電話 086-254-6131(須本)  
公式HP <https://ujo-tsumugi.jp/>  
印刷所 活文堂印刷株式会社

---

---

助成



公益財団法人  
福武教育文化振興財団